東京家政大学　学修・教育開発センター

CRED通信 17

クレッド

2023.3

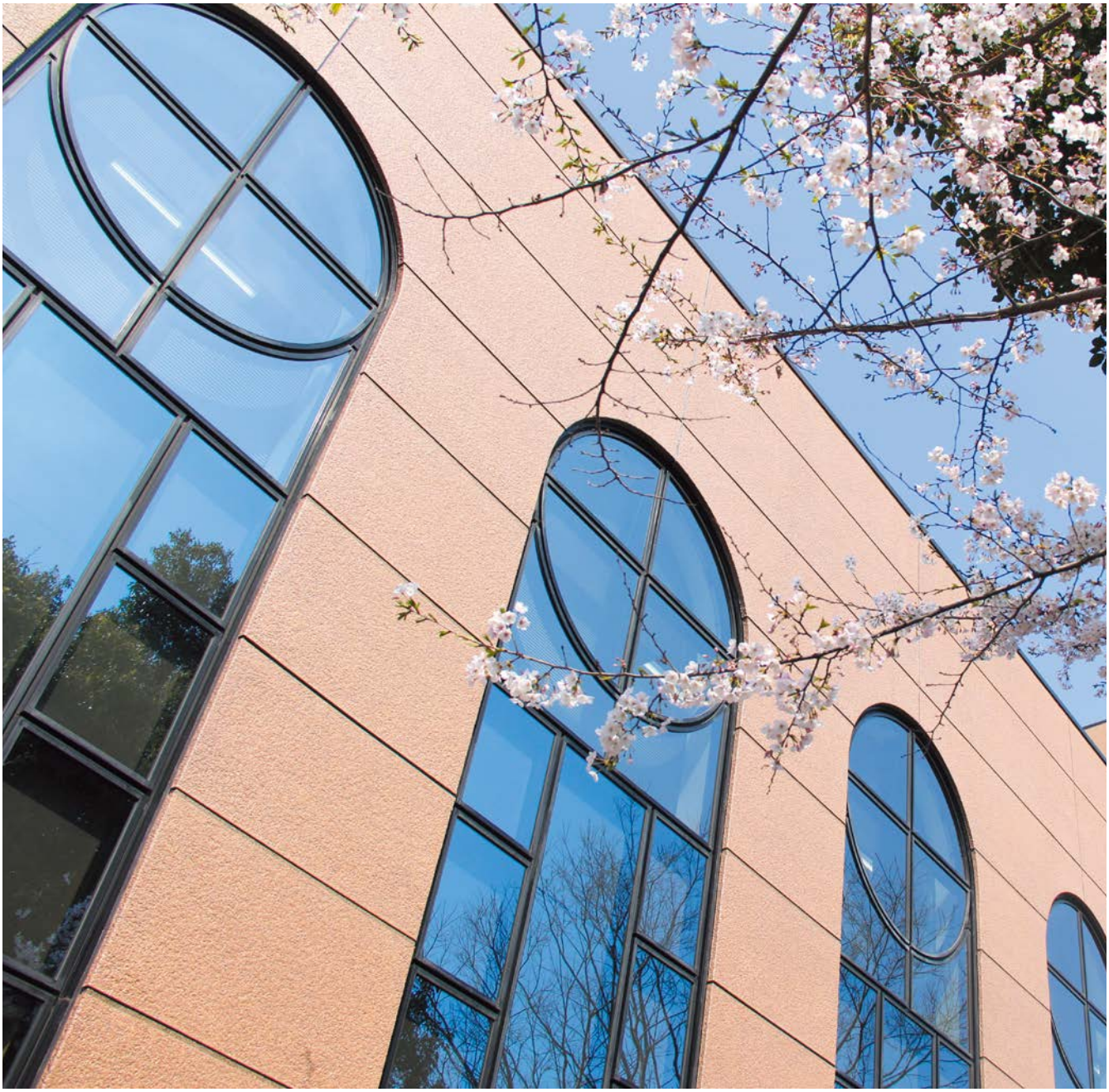
「自主自律の学び」を研究・支援します。

01 CRED TOPICS
『GOOD授業賞』の
新設にあたって

02 CRED REPORT
教職員研究会
アセスメントミニFD

03 CRED COLUMN　学長裁量研修
CRED REPORT
共催によるFD·SD実施報告
学長と学生の意見交換会

04 CRED REPORT
学生CRED
緑苑祭報告
クリスマス交流会



05 CRED NEWS
manabaとresponに新しい
機能が追加されました

06 CRED TOPICS
K-PORT

07 CRED NEWS
活動記録
2022.04–2023.03

08 CRED REPORT　IR報告
本学の数理・コンピュータに関わる
能力の教育成果を追って

TOKYO KASEI UNIVERSITY

CRED TOPICS × GOOD授業賞

令和4年度新設『GOOD授業賞』

制度の新設にあたって

学修・教育開発センター（CRED）　所長　兼古 昭彦

今回新設に至ったGOOD授業賞の本質は名称に込められています。ベストではなく「GOOD」、ティーチャーではなく「授業」とし、誰が一番という順列をつけることが目的ではなく、良い取り組みを広く顕彰するという意思表明とともに、本学は、授業科目レベルの取り組みを大事にしているということが併せて表現されています。もちろん、それぞれの授業の取り組みは各担当の先生方の熱意があってこそ実現しているものであり、その栄誉を讃えるという目的もあります。今回選出された授業のような興味深い工夫のされている授業がたくさんあることを広く知っていただき、新設の目的が達成されることを願っています。

目　的

1. 授業の学生満足度が高く、教育的に質の高い授業を選出し、担当教員の栄誉を称える。
2. 表彰制度により教育内容や教育方法の改善に向けた教員のモチベーションを高める。
3. 受賞者の授業運営に関する経験値や知見等を共有し、全学的に組織的な教育レベルの底上げを図る。

選　考

前年度の授業評価アンケートの平均スコアが上位の授業について、「GOOD授業賞選考委員会」が総合的に審査し、表彰授業を選考する。

令和4年度の表彰授業

専門教育科目

学部	学科 / 科	授業名	担当教員
家政	児童	保育内容演習（環境）	佐藤康富
家政	児童教育	理科教育法	関根正弘
人文	心理カウンセリング	キャップストーン	岡島義／齊藤和貴／平野真理
健康科学	看護	ヘルスアセスメントの技術	松江なるえ／柳田真季子／酒井博子／谷岸悦子／藤森京子
子ども	子ども支援	社会福祉概論	岩崎雅美
短大	保育	保育内容の理解と方法C（造形）	川合沙弥香

専門教育科目以外

種別	授業名	担当教員
教職課程科目	教職実践演習（幼）	荒井庸子
共通教育科目	人間と学びE（しなやかな心とからだ）	花輪充／玉川さやか／吉村温子

表彰式

令和4年10月21日（金）「GOOD授業賞」表彰式を学長室にて執り行いました。三浦正江副学長、兼古昭彦CRED所長、大西淳之CRED参事の立ち合いのもと、井上俊哉学長から表彰授業の担当教員へ表彰状とクリスタルトロフィーが授与されました。このクリスタルトロフィーには、表彰授業に選ばれたことの価値と尊さをそのずっしりとした重みから実感していただきたいという想いが込められています。

FD活動への展開

令和5年2月15日（水）に実施したリサーチウィークス「オープニングレクチャー」では、令和4年度「GOOD授業賞」の表彰授業の担当教員に、授業方法や授業運営、学生との関わり方など、工夫している点や普段から心がけていることをレクチャーしてもらいました。

岩崎雅美准教授（子ども学部子ども支援学科）からは「学生が集中し続けられる授業に散りばめられる5つのコツ」、関根正弘期限付准教授（家政学部児童教育学科）からは「実例紹介から見る授業外フォローアップのノウハウ」をテーマに授業改善の実践が紹介されました。「他の授業でも活用しやすい内容で自分の授業でも参考にしたい」との声が参加教員から寄せられました。

表彰授業紹介　心理カウンセリング学科「キャップストーン」　担当教員　岡島 義／齊藤 和貴／平野 真里

学修経験を統合し、現在における学びの到達点を確認

授業概要（シラバスより抜粋）

キャップストーンとは、石を積み上げた建造物（たとえばピラミッド）の頂点に置く石のことです。この授業は、入学してから積み上げてきた学修経験の統合が必要な課題に取り組み、学科の学位授与方針で示す「学修成果」を獲得できていることを、自他に示すことを目標としています。課題に対して4、5名程度でチームを作り、協同して課題解決に取り組んでもらいます。

担当教員による授業改善の工夫点など

入学してから4年生前期までに学修してきたことを統合し、現在における学びの到達点を確認するための授業です。イントロダクション（第1回）とまとめ（第14回）を除く12回の授業を4回ずつの3パートに分け、それぞれを別の教員が担当します。3名の担当教員は、「自己理解」、「他者理解」、「社会実践」のいずれかの観点から興味深く具体的な課題を提示し、学生は4人程度のグループで提示された課題の解決に当たります。各パートは、①課題の提示、②（課題解決のための）計画立案、③計画実行、④成果発表という共通のフォーマットを取っています。このことにより、他者と協同し心理カウンセリング学科で学んできた力を発揮し課題に取り組み、成果をプレゼンテーションするという体験を3度繰り返すことができます。また、3名の担当教員がそれぞれの個性を発揮し、学生たちが主体的に課題に取り組めるよう工夫をこらした指導を行い、学生たちもそれに応えて自他の個性を認め合いながら創意工夫し取り組んでいることも、この授業の特長となっています。

学生のコメント
授業評価アンケートより

- それぞれの回で担当教員と授業課題が変わり、グループも変わってとても面白かったです。全体で少ない人数でしたが、4回でもグループの人と沢山ディスカッション出来てよかったなと思いました。今まで心理カウンセリング学科として何を学んできたかを考える時がありませんでしたが、いざ振り返ると沢山のことを学んできたのだなと思いました。4年間を振り返れてよかったです。
- 今までの経験や知識から、多方面に生かせるよう課題が提示され、大変有意義な講義でした。心理カウンセリング学科で学んだことは、4年間で終わりではなく、今後に生かされることばかりだなと実感しました。

表彰授業紹介　教職課程科目「教職実践演習（幼）」　担当教員　荒井 庸子

事前課題、フィードバック、実技披露、資料共有…etc 多方面からの授業改善アプローチ

授業概要（シラバスより抜粋）

実習を含むこれまでの大学での学習内容の整理と、様々な情報の収集を通して教職に向けての個々の課題を析出し、その検討を通して、上記の目標の到達を目指します。学生各自による省察とその相互批評、ならびにグループ活動を中心に展開し、その内容について担当教員が適宜、講評・助言等の指導を行います。

担当教員による授業改善の工夫点など

学生間の討論など演習が中心となるため、個々の提出物へのコメント、グループワーク・発表等に対するフィードバックを丁寧に行うことを意識しています。また、グループワークは短時間で円滑に行えるよう、各授業テーマに関する事前課題を準備すると同時に、グループ内の役割（進行・発表等）の決め方を工夫しています。学生がグループ発表を行う際は、その準備段階で教員がモデルを見せ、他の受講生も参加できる発表スタイルを具体的に提案しています。その結果、各グループが、他の受講生に向けた事前資料を作成するようになり、発表者のテーマに対する探求心も深まりました。受講生も事前課題に取り組んだ上で参加するため、聴講する側の主体性も高まりました。さらに、各授業の始まりと終わりの5分程度で、全ての受講生が順番に「子どもの興味をひきつける」をテーマに保育実技を披露する機会を設けました。発表内容は、イラストや写真に文章を添えて表現する機会を作り、今後の教職の仕事に活かすことを目的として、受講生間で作成資料を共有できるようにしています。

学生のコメント
授業評価アンケートより

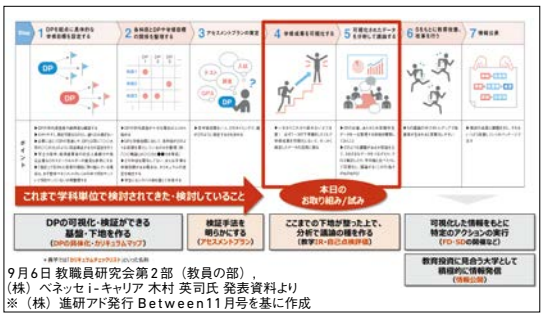
- 自分達で授業（発表）をするなんて大変だなぁと思っていましたが、大変さ以上に学びがありました。先生のあたたかい言葉にいつも励まされました。
- 保育者として働くことを一番意識しながら受講できた授業でした。内容が実践演習というだけあって、実践的なことを多く取り扱い、友達と話しながらたくさんのことを学べました。この授業で学んだことを今後に活かして行けるよう頑張ります！
- 友達と意見交換をする時間があったり、友達の発表の仕方から学びがあったり、保育実技の披露を通して様々な遊びを知れたことが4年間最後の授業としてとても有意義でした。

教職員研究会第２部＜教員の部＞

令和４年度、東京家政大学及び東京家政大学短期大学部では「教学マネジメントの確立」をテーマとして教学マネジメント検討の根拠となる「学修成果」の可視化を推進している。年度初めより各学科・科単位にて①アセスメントプラン推進組織の立ち上げ（～３月）、②アセスメントプランの策定（～６月）、③アセスメントの実施（～９月）、をそれぞれ実施している。

今回実施した教職員研究会第２部は、前後編の構成としており、まず前半部ではbetween等で質保証に係るコラムや他大学支援等で実績を持つ㈱ベネッセ i-キャリア 大社接続本部 企画課 課長木村英司様より講演「「アセスメントプラン策定」と「教学マネジメント」の情報整理」として、文部科学省等高等教育政策のうち「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」や「教学マネジメント指針」といった大方針の中でアセスメントの定義や役割、本学の現在の取組みがどのような位置づけなのか解説をいただいた。

続いて後編では、現在まで学科・科単位で実施した取組を発表・報告し、どのようなデータから何を導き出しているのか。分析目的や手法について共有するとともに、ベネッセご担当者より取組単位でコメントを頂くことで、全学的なアセスメントの理解を一層深め、手法の向上を図った。



9月6日 教職員研究会第２部（教員の部）,
（株）ベネッセ i-キャリア 木村 英司氏 発表資料より
※（株）進研アド発行 Between11月号を基に作成

当日は205名が参加し、アンケートでは参加者の約９割が「他学科の発表が参考になった」と回答するとともに、研修全体では参加者の約８割が「満足・やや満足」と回答しており、本研修がアセスメント理解の助けになったことが読み取れた。一方で本学のアセスメントプランは「学位授与の方針（ディプロマポリシー）に対する達成度を測る」という指標のため、ポリシー設定の無い共通科目群について、学修成果の可視化をどのように実施すればよいか等課題も確認が出来た。

今回の研修において成果のあったデータ収集・分析の結果に対して、次のステップでは得られた結果をどのように評価し、改善案を策定し、実行するかという具体化の段階となる。この一連の本学の取組みは実際の教育改善に向けて非常に有意義なものになると期待される。

アセスメントミニFDについて

CREDでは各学科のアセスメントプラン策定及び、プランに基づく自己点検を推進するため、継続的にアセスメント担当者を対象としたミニFDを実施しております。1月10日には「学科独自のアセスメントプラン活用に向けて~高等教育を取り巻く論点・他大学の課題意識から改善の見通しを持った可視化を学ぶ~」をテーマとして本年度３回目の開催をしました。

ここでは、過去２回のミニFDと教職員研究会第２部（教員の部）にて各学科・科で実施したアセスメントプランについて、改善のための提案及び今後につながるための活動をテーマに取り扱いました。

改善提案は２点、①複数の評価指標の活用、②改善内容の整理を挙げております。

まず「①複数の評価指標の活用」では、複数の評価（直接指標：専門家の評価やアセスメントテストなど＋間接指標：個人の主観、アンケートなど）を組み合わせて用いることを推奨しています。これは間接評価は学生の主観的な「できた/できなかった」を測るため、具体的に「何が」「どの程度」できたのかを表すことが出来ないのに対し、直接評価は「成績の高い/低い」を客観的に示すことで外部に向けた学修成果を可視化しやすい反面、「なぜ高いのか/低いのか」まで把握することが難しい指標であるという相互に補完する性質であることが理由となります。実際の成績と行動様式双方を紐づけることによって、例えば成績の低い学生の学修行動が明らかとなり、教育改善を講ずることが可能となります。

続いて「②改善内容の整理」では今回のアセスメントの結果に基づいて各学科が設定する課題についてA.アセスメント手法上の問題、B.教育課程上の課題に分けることを推奨しています。これは今回のアセスメントを「ただ分析しただけ」に留まらせず、改善すべき課題を明確化し、小さな内容でも確実に実行に移し、教育課程の可視化や改善を進めていきたいという意図によるものです。教育改善というとカリキュラム改訂等大がかりなものを想定しがちではありますが、アセスメントの段階で「この授業はDP達成度へ影響が大きい/影響が小さい」といった現状を把握するだけでも非常に有益な情報となりえます。そのようなカリキュラムの解像度を高めるための取組全てが本学の教育改善につながると考えられます。

今後は各学科・科のアセスメント結果に基づく課題を「いつまでに」「どうやって」解決するかの具体化にあたり、大学全体で「アクションプラン」という枠組みを用いて課題設定・実行企画・進捗管理を実施していきます。CREDでは各学科・科と連携し、この枠組みを通じて「教育改善のPDCA」を明確化するとともに、自己点検や中期計画等と連動することで、効率的に第三者に分かりやすく情報提示できる体制の整備を推進してまいります。

Writer
神保 正典
Masanori Jimbo
学修・教育開発センター

教職員研究会第二部＜職員の部＞

この数年のコロナ禍の影響もあり、教職員研究会のオンライン化や各種行事の中止などが相次ぎ、部署間や教職員同士の交流機会が減りました。そこで、令和４年度の教職員研究会第二部＜職員の部＞は、職員同士が交流する機会を取り戻すことをコンセプトに組み立てました。他部署で働く誰か、自分とは育った時代が全く違う異年齢の誰か、いろいろな職員同士で話し合う機会が意味を持つのではないか、企画を担当したCREDおよび大学改革SD推進小委員会にて協議・検討を重ねてまとまった方向性です。そして、研修という日常業務から距離を置いた空気の中で、まとまった時間だからこそ立ち止まって考えてみたい、東京家政大学の未来を左右するテーマを用意し、東京家政大学で共に働く職員一人ひとりが、自分なりの意見を発信し、共有して互いに深めることを目指しました。

●目的
他部署との交流／世代間の交流／若手職員の育成／経営層への報告

●目標
1.東京家政大学の未来を自分事として考える。
2.職場の心理的安全性(*)を醸成する。
3.若手職員のファシリテーションスキルを育成する。
4.学内の意見を経営層に伝え、将来構想に生かす。

(*) 組織の中で自分の考えや気持ちを誰に対してでも安心して発言できる状態のこと

令和4年10月には同じ世代で話し合う世代別グループでのディスカッション、続いて11月には異なる世代が混在するミックスグループでのディスカッションを実施しました。各グループは指定されたテーマについて各人が事前に情報収集などの予習をしてディスカッションにのぞみ、世代別グループでのディスカッション内容をミックスグループで共有することで、より多様な意見を交換することができました。また、ディスカッションは指定された期間内に各グループが自由に場所と時間を設定して行う形式を採用したことも今年度の特徴です。

●7つのテーマ
①：職員の人事評価　こうあるべきアイディア3選とその理由
②：お金・人材・時間の使い方　無駄使いベスト3とその解決案
③：職員の働き方改革　着手すべきベスト3とその導入案
④：理想のリーダーシップとフォローシップ　目指したい人物像
⑤：今後採用する人材に求めたいこと　ベスト3とその理由
⑥：教員と職員の関係性はどうあるべき？お互いに何が変わるべき？
⑦：東京家政大学は女子大のままで良いのか？

令和5年1月31日には①～⑦のテーマごとに選ばれた若手職員がディスカッション内容をプレゼンテーション発表により理事会へ報告しました。その報告に対して、理事会を構成する理事長・理事・監事よりテーマごとのフィードバックと総括をいただきました。職員と理事会の両者が、各テーマに関してどんな意見を持っているのかを双方向で共有することで、学園の未来をともに考える組織風土を醸成することを目指して企画しました。当日のプレゼンテーション発表などは動画収録の上、全学向けに動画を配信・共有しました。

例年とは全く異なるアプローチで取り組んだ令和４年度の教職員研究会第二部＜職員の部＞には以下のような感想が寄せられ、今後の展開について言及するアンケート回答も目立ちました。

●誰かの話を聞くだけの研修よりも、今回の研修は充実度が高かった。同世代のディスカッションは予想以上に盛り上がったので楽しめました。
●他部署の職員との交流が全くなかったので、とても良い機会となりました。今でもディスカッションしたメンバーと顔を合わせると立ち話できるくらいになりました。
●今まで渡辺学園で受けた研修の中で一番何をしてほしいのか目的がわかりやすい研修でした。
●どの年代もこのままで良いとは思っておらず、さらに年代間のギャップもあまりないのだと全チームの報告書から感じました。変えるための具体的な取り組みに繋げるにはどうすれば良いのか、ディスカッションでだけ終わらないための次の施策が必要だと思いました。
●今回の開催方法は研修を受講するという受け身の姿勢ではなく、各職員が意見を積極的に発言できる仕組みでコミュニケーションが取りやすかったと感じました。最終的な理事会発表を通し、テーマは違えども共通の課題・提案事項が見えてきたかと思います。今回提案として上がった解決策の中から、実際に実行される施策や制度があることを期待します。

来年度以降もさらに実りある教職員研究会となるよう、大学改革SD推進小委員会とともに内容を企画・検討してまいります。

Writer
川島 直子
Naoko Kawashima
学修・教育開発センター

学長裁量研修

健康科学部リハビリテーション学科　岡部 拓大

「COVID-19パンデミックを契機とした実習教育改革」
-OSCEを用いたProblem-based Learningによるリハビリテーション学習システムの確立-

COVID-19パンデミックに伴い、医療職では臨床実習を代替する学習方法の確立が急務となっている。2021年度の学長裁量経費による取り組みでは、臨床実習を代替する実習において、学生が実技指導動画教材（症例設定、評価基準設定、実技動画）を作成し、学科内の自己学習コンテンツとして共有する試みを行った。本取り組みは、PBLを活用した演習を行い、臨床で必要なコンピテンシーの修得すること、また、作成した教材をオンラインコンテンツとして共有することにより、ICT自己学習プラットフォームの更なる拡充を目的とした。

本演習により、疾患に対しての基礎的な知識からリハビリテーション各論に至るまでの知識を修得でき、また、設定した疾患やその程度によってどのような検査測定結果や介入方法になるかを想定するといった臨床推論の促しとなった。動画撮影・編集では、表現力やICT技術の向上にもつながった。作成した教材を共有したことで、幅広い臨床技能の獲得や、自身の成果物が他者の有益な学習素材となることで、学生の自己効力感にも繋がった。

本取り組みでは、指導するという立場よりも、学生とチームとなり、共に考えるかかわりを意識し、学生たちのアイディアやコンセプトを主導にしておこなった。これにより、潜在化している学生の思考や可能性を顕在化し、学生に対する認識を見直す契機となり、共に試行錯誤しながら取り組むことで、教員も共に研鑽できた。また、GoogleやApple、Windowsの各アプリを活用した経験は、日々のアクティブラーニングを活用した授業等、今後の教育方法に活用できると考える。

COVID-19パンデミックによる弊害は、これまでの教育活動を振り返る機会でもあり、教育改革を加速させる機会でもある。困難に見舞われた時こそ、新しい教育体制の分岐点になりうるため、教員は時代に則した効果的な学びを得るためにはどうすればよいかを考え、実践する契機となると思う。

学長裁量研修

児童学科／保育科　尾崎 司、金城 悟、松本 なるみ、大西 明実、高畑 祐子

施設実習におけるルーブリックの開発についての概略等

保育士資格を取得する上で、養成校では保育所とそれ以外の児童福祉施設での実習が必須です。2016年よりルーブリック評価法を保育実習領域に導入し、保育所実習のルーブリック開発をおこなってきました。その知見を活用して、今回は施設実習用ルーブリックを開発しました。施設実習ではこれまで、乳児院・児童養護施設・児童発達支援センター・障害児支援施設など実習先の種別は多岐に渡っており、それぞれの種別への対応が課題でした。この課題解決に対して、保育者養成に必要で、かつ種別が異なっても共通する「ケア」という枠組みからアプローチしました。また、その評価尺度は通常の規範的なものではなく、習熟・深化の過程を経ることから、Ideas（アイディア）、Connections（つながり）、Extensions（応用）を頭文字に取ったICEモデルに着目しました。そうして出来上がったのが、縦軸に「A.施設の役割と機能」、「B.利用者(子ども)の理解」、「C.利用者(子ども)の支援」、「D.ウェルビーイング」という評価観点を、そして横軸には「概念への興味関心」段階、「関連づけの理解」段階、そして「理解から実践への展開」段階という評価尺度で構成された、ICEルーブリックです。本研究ではまずこれを仮に作り実際に試し、その使用感を確かめながら検証していく、プロトタイピングによるアクションリサーチをおこないました。成果物としては、①施設実習用ルーブリック、②ルーブリックを活用した実習日誌、③ルーブリックを活用した事後学習シートが考案できました。

評価観点	すばらしい！ 理解から実践へ展開できる	よくがんばりました！ 関連づけて理解できる	がんばりました！ 興味関心を持つことができる
(1) 実習指導を受ける態度	言われたことや助言を素直に受けさめ、理解したとで行動することができる。	言われたことや助言を素直に受けさめ、その意味を理解することができる。	言われたことや助言を素直に受けさめることができる。
(2) 施設の役割や機能	施設の役割や機能を理解したとで行動することができる。	施設の役割や機能を理解し、それらを利用者の姿に結びつけて記録や質問をすることができる。	施設の役割や機能をおおよそ理解している。
(3) 利用者（子ども）の理解	個々の利用者の姿に関心を持ち、その行動の理由や原因を考察したとで行動することができる。	個々の利用者の姿に関心を持ち、事前学習と関連付けて記録や質問ができる。	個々の利用者の姿に関心を持つことができる。
(4) 利用者（子ども）の支援	支援者の言動から利用者支援に関心を持ち、支援者の意図や関わり方、考え方を実際の支援に取り入れようとしている。	支援者の言動から利用者支援に関心を持ち、記録や質問をすることができる。	支援者の言動から利用者支援に関心を持つことができる。
(5) ウェルビーイング	利用者の視点や立場に立ち、利用者の最善の利益・幸福について考察したとで利用者支援に繋げようとしている。	利用者の視点や立場に立ち、利用者の最善の利益・幸福に関連づけて、記録や質問ができる。	利用者の最善の利益・幸福という観点から、利用者の生活について関心を持つことができる。

今回の研修では、評価対象への課題解決アプローチやICEルーブリック、そして3つの成果物を示すことで、分野が違っても参考になる部分が少しでもあればと思い、お話しさせていただきました。保育実習科目は児童学科・保育科のアセスメント科目と位置付けられているので、今後は学修成果の可視化と連動して運用を検討していきたいと思います。

共催によるFD･SD実施報告

「うつ病を知る」ことで学生に寄り添う

コロナ渦が３年目に入った今年度、障がい学生支援の窓口を担っている学生支援課には、「一日中、落ち込んでいて何も手につかない」「授業に来られない」など、学生の声が届いています。そこで、障がい学生等支援委員会として実施する「障がい理解研修」とは別に、障がい学生支援の窓口の部署として、教職員から枠を広げ、学生も参加できる研修を企画しました。

令和４年度は、「うつ病を知る」というテーマで、教職員と学生に、それぞれ異なる立場から考える研修内容で、講師は中央大学人文科学研究所客員研究員の高橋聡美博士をお迎えしました。講演を９月９日（金）にライブ配信し、９月12日（月）～10月７日（金）に動画を配信しました。

第1部　学生用：「自分を大切にするために。折れる心の守り方」
1. コロナ渦で起きていること　特に、若者の周辺に焦点をあてて
2. 心のSOSの出し方

第2部　教職員用：「学生のSOSの受け止め方　～昨今の大学生の自殺の急増を踏まえて」
1. コロナ渦で起きていること　特に、若者の周辺に焦点をあてて
2. 「死にたい」と言っている人に、どのように対応すべきか
3. 自殺予防教育の必要性　SOSの受け止め方

「うつ症状などのメンタル面で問題を抱えている学生が多いと感じていたので、大変勉強になった」「学生に寄り添う大切さを再確認しました」などの感想が教職員からありました。学生用の動画視聴者からは、「最近の自分の、どうにもならない無気力や悲観的になってしまう理由が少しわかった気がする」「しんどさは、自分の弱さではなく、誰にでも起こること」「レジリエンスに対する考えが変わった。他者の回復に携わるものもレジリエンスであるということを知った」などの声がありました。

障がいを理解することは、多様な価値を認め合い、学ぶキャンパスの環境づくりの一助になると考えられます。今後もCREDの支援を受けながら、広報、企画内容を工夫し様々な障がいに関わる研修を企画いたします。（学生支援課）

学長と学生の意見交換会

大学生活への意欲的な意見

令和４年11月１日（火）13：25～15：05、「令和４年度学長と学生の意見交換会」を板橋図書館１階ラーニングコモンズ£プラザにて実施し、井上俊哉学長・三浦正江副学長、両キャンパスから大学・短大あわせて16名の学生が参加しました。

開催にあたっては、事前に大学・短大の全学生に対し大学に関するアンケートを実施し、その結果をもとに当日は「もっとこんな授業があればよいのに」「学外活動で学べる事、大学のサポートであったらいいこと」の２テーマを軸に、大学運営やカリキュラム改善に関する意見交換を行いました。

１時間半という限られた時間でしたが、参加学生からは「それぞれの学生が大学生活に対して意欲的に意見を出しており、同じ学生として身の引き締まる思いでした。今日を機に、大学生活をより良くするための気付きを得られるよう、意識をもって過ごしたいと思います」「これまでは『学生と教職員の交流会』の有効性があまりわかっていませんでしたが、今日の話を聞いて、カリキュラムは学科ごとにつくられているため、学生のニーズは学科の教員に伝えるのが良いとわかりました」などの声が寄せられ、非常に有意義な時間となりました。引き続き、学生の声を大学運営にどのように反映させることができるのか検討してまいります。

CRED REPORT × 学生CRED

緑苑祭報告 in 1-5A講談室

PROGRAM ❶学生 CRED 活動報告
❷家政大クイズに挑戦して学生 CRED オリジナルキャラクターステッカーをゲット

10/22 SAT 10/23 SUN 板橋キャンパス緑苑祭会場にて

緑苑祭報告

Chihiro Ueno

上野千景
教育福祉学科2年

DATA
2022年10月22日（土）一般11名、職員7名、学生10名、高校生0名、こども6名
2022年10月23日（日）一般33名、職員1名、学生8名、高校生2名、こども8名
合計86名

学生CREDの知名度を上げたい マスコットキャラクター‘くぅちゃん’お披露目!

2022年10月22日、23日に行われました緑苑祭に、学生CREDも参加させてしました。活動を行っている中で、多くの学生CREDのメンバーが、普段の大学生活で「学生CREDって何をしている団体なのか？」と聞かれることが何度もありました。そこで緑苑祭という学内の学生、生徒以外にも受験生や地域の方々が多く来場してくださるこの機会に、学生CREDのことをもっと知ってもらいたい、そして今後のイベントや活動にも多くの学生に積極的に参加してもらいたいという思いで参加を決めました。これまで学生CREDとして緑苑祭に参加したことがなく、前例がない中で一からメンバー同士で話し合い、企画を考えていくことは大変難しい時もありました。しかし同時にやりがいも感じることができました。昨年度はコロナウィルス感染対策のため、対面での活動が十分にできていませんでしたが、対面での緑苑祭の準備を通して学生CREDメンバー同士の結束力もさらに強めることができたと感じています。

また以前から学生CREDを身近に感じてほしい、知名度を上げたいという思いからマスコットキャラクターの作成という案がありました。そのため、緑苑祭では学生CREDのマスコットキャラクター(くぅちゃん)を発表し、グッズ配布をすることができました。来場者がくぅちゃんと一緒に写真を撮ってくださっていた光景も多く見ることができ、身近に感じてもらうきっかけになったと思っています。

当日はCREDや東京家政大学に関するクイズ、日頃の学生CREDの活動を模造紙や映像での紹介、くぅちゃんとのフォトスポットを用意しました。実際に多くの方々が来場してくださり、学生CREDのことを知ってもらうことができたと思っています。メンバー内で振り返りをしたときに、「学生CREDメンバーと来場者がコミュニケーションを取ることができた」という意見が多く出ました。クイズを解いてもらったり、展示を見てもらったりするだけでなく、会話を通して交流することができ、私たちも貴重な機会になったと感じています。

新しい試みであり、不安もありましたが、事後に行った反省会でも1～3年の全メンバーが来年も参加したいと答えてくれました。これからも新しいことに挑戦しながら、学生が少しでも充実した大学生活を送ることができるように、私たち学生CREDも、学生からの目線をいかして活動していきたいと改めて思うことができました。

緑苑祭の参加にあたり、先生方、職員の方々に支えていただいたことで、成功させることができたと思っています。ありがとうございました。

CRED REPORT × 学生CRED

クリスマス交流会 in 1-4B講義室

12/1 THU
- 15：30 開会あいさつ
- 15：40 アイスブレイク
- 15：50 レクリエーション（学科クイズ、文字並び替えゲーム、ビンゴ）
- 17：10 フリートークタイム

クリスマス交流会

Reina Yamooka

谷茂岡怜名
環境教育学科1年

DATA
2022年12月1日（木）
＜学科内訳＞児童1、児教1、栄養2、管士3、環教5、造形5、英コミ3、教福3
＜学年内訳＞4年7人、3年5人、2年4人、1年8人

5年ぶりに開催!
話し声と笑い声があふれた時間

2022年12月1日に、学生CRED企画「クリスマス交流会」を開催いたしました。本交流会は「学科・学年を超えた交流によって、お互いの学生生活についての見聞を深めたい」という考えのもと企画され、学生生活に関するテーマトークと、クリスマスになぞらえたレクリエーションを行いました。本交流会は2017年の第一回目以降開催が難しくなっていたため、この会に関わった学生CREDメンバー全員が試行錯誤しながら、知恵を集めあって準備を進めてまいりました。会の最後に行ったアンケートでは、参加した多くの学生から満足できたという感想が寄せられ、企画チーム全員が開催して良かったと感じております。特に今回の会の主軸でもあった、他学科・他学年との交流という点に関しては前向きな意見が多く、学生CREDメンバーも含めた参加者全員が達成できたといえると考えています。

交流会は夏頃に企画運営を開始しました。クリスマス交流会自体、2017年以降開催されていなく、学生CREDメンバーの誰もクリスマス会を体験したことがないというので、準備には困難を極めました。このイベントでは、各学科に関するクイズとクリスマスソングのタイトルの文字並べ替えというゲーム二種類とフリートークを行いました。色々な学生との交流のために、学科をバラバラにして参加者を五つの班にわけ、そこに学生CREDメンバーも加わって交流会を行いました。班のみんなとじっくり話し合えるように少人数で想定していたため、クイズやフリートークで中を深められたと感じています。

迎えた当日は、トラブルが発生しながらも無事に最後まで開催することができました。私も参加者に交じって、お互いの学科についての理解を深めたり、上級学年の話を聞いたりなど見聞を深められたと思います。クイズで他の学科や自分の学科についても見直すきっかけにもなったと感じています。各所からも絶えず話し声や笑い声などが聞こえたので、参加者全員の会話が弾んでいた様子が見て取ることができました。

このクリスマス交流会を通して、様々な課題や次までの改善点などを見つけることができました。この改善点を参考にして、今後学生CREDで企画する際により良い会にできるようにしたいと考えています。最後に、今回のクリスマス交流会では参加していただいた学生の皆様を始め、学生CREDのメンバーや教職員の皆様のおかげで無事開催することができました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

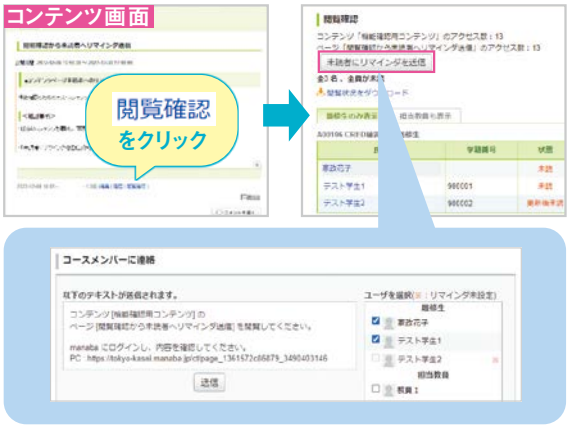
manabaとresponに新しい機能が追加されました

manabaから東京家政大学HP・ポータル・MyCampusのサイトが開けます。

manabaにログイン後の画面右下から大学HP、ポータル、MyCampus（大学HP）のサイトが開けるようになりましたので、大学のお知らせや履修に関する情報、MyCampusに掲載しているmanabaコースの登録キー等をご確認する際はぜひご利用ください。

コンテンツページ未読者へのリマインダ送信

コンテンツの「閲覧確認」から、未読者にリマインダを送信することができるようになりました。送信対象者はコースメンバーからチェックボックスで選択します。コンテンツ未読者（更新後未読を含む）には、あらかじめチェックが入っています。チェックを追加すれば、一度閲覧した学生にもメッセージを送ることができます。



ライブラリ機能

蓄積された教材（課題やコンテンツ）を、コースを横断して一覧で見ることができます。 また、作成した教材を他のコースにコピーすることもできます。

従来通り、インポートとエクスポート機能を利用して、manabaからダウンロードしたファイルをアップロードして課題やコンテンツをコピーいただくこともできますが、ライブラリ機能をご利用いただくと画面上で簡単にコピーすることができます。

また、開きたいコースの選択はコース一覧からしかできなかったところが、ライブラリ機能からも登録しているコースを確認して選択できるようになり、さらにコースの中の課題やコンテンツも選択して確認することができます。

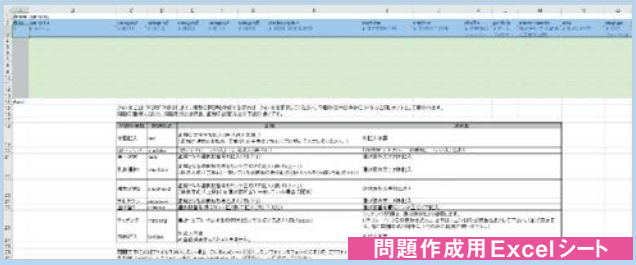
教材で絞り込みを行うと、その教材を指定するコースにコピーすることができます。

小テスト Excel&CSVによる問題一括作成機能

指定のフォーマット(Excel/CSV)で記述し、アップロードすることで、問題を一括して作成することができるようになりました。インターネットを接続していない環境でも、Excelが使用できれば、問題を作成することができます。

こちらの機能は、「小テスト」から利用でき、手動採点小テスト、自動採点小テスト、ドリル用問題の作成に対応しています。

※作成した問題をmanabaにアップロードする際はインターネット接続が必要です。
※Excel/CSVファイルをダウンロードできるのはフォーマットのみです。アップロード済のテスト・ドリル問題をExcel/CSV形式でダウンロードすることはできませんので、ご注意ください。



respon「ルーム機能」のご紹介

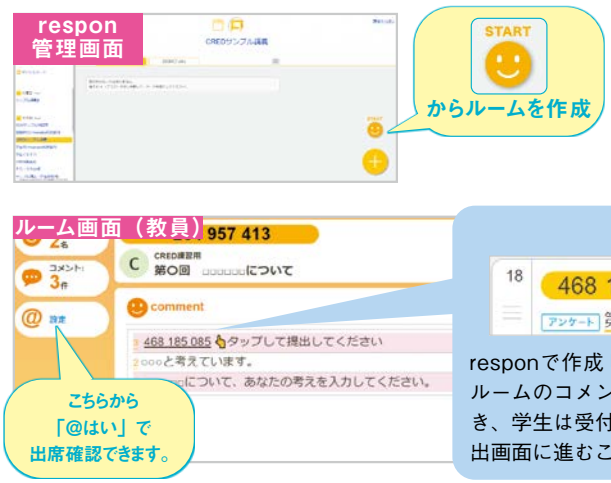
学生からの質問を受ける場として利用いただくことを想定された、チャットに似た、新しいコミュニケーション機能です。授業中のみならず、授業以外でもご利用いただけます（次の授業までの間、課題の質問を受け付ける等）。

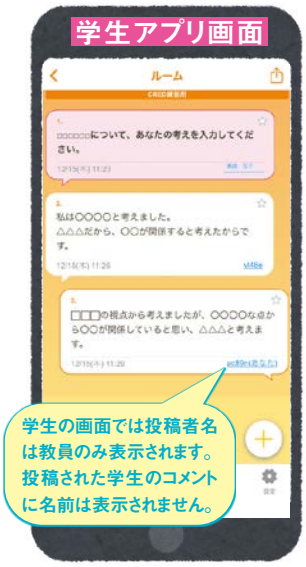
manabaのコースごとに1つルームを開催することができます。

開催中のルームがあるとき、カード管理画面では、カードの受付番号の右に、ルームアイコンが表示されます。このアイコンをクリックすると、カードの受付番号をルームに投稿できます。

投稿された受付番号は学生の画面ではリンクとなり、タップすることでアプリの「GO」画面に遷移します。学生は受付番号を入力しないで、提出画面に進むことができます。

また、ルーム機能の中で学生が「@はい」を投稿することで、出席カードを発行しなくても出席確認ができます。





※ manabaやresponに関する操作方法は、manabaの「A00003 教職員向けmanaba利用案内」コース内のコンテンツ「操作マニュアル」からご確認いただけます。　お問い合わせ窓口：manabaサポート（manaba@tokyo-kasei.ac.jp）

CRED TOPICS × K-PORT

K-PORT（学修ポートフォリオシステム）令和５年度より始動

大学全体としてこれらの目的に取り組むために、また本学の質保証システムの構築のため、K-PORT（学修ポートフォリオシステム）を令和5年度より始動します。

・学修成果のアセスメントを確実に、かつ効率的に行う。
・在学中に何を学び、卒業時にどのような知識・能力・技能を獲得することができたのか、学生と教職員がともに学修成果を把握及び可視化できるようにする。
・主体的に学修に取り組み自律的な学修者を育成するための支援ができるようにする。

成長の記録を積み込んで Bon voyage!
K-PORT
TOKYO KASEI PORTFOLIO

K-PORTに込めた願い

K-PORT はKASEI PORTFOLIOを略して命名されました。PORTを港と読み替え、東京家政大学での学修や経験を通じた成長を自分の船にたくさん積み込んで、港から社会に向けて出港して欲しい、その成長を記録するための学生に役立つツールになって欲しいという願いを込めました。ロゴはCRED兼古所長がデザインしました。

学生に向けたK-PORTのメリット

何がどのくらいできるようになったか到達度がチャートで一目瞭然

成績（GPA）の推移などが確認できるほか、DP（ディプロマポリシー）の到達度をチャートで視覚的に把握することができます。また、問題解決力を測定するGPS-Academicの結果を閲覧することも可能です。自分が何をどのくらいできるようになったのかがわかると、前向きな気持ちになり自己肯定感が高まります。少し足りないなと思う力が見つかったら、それを次の目標にして努力を続ければ、さらにステップアップできます。

辿り着きたい目的地を明確に振り返りで自分を見つめ直す

K-PORTでは学年ごとに目標を設定し、年度が終わると振り返りを行うことができます。自分で目標を設定すると、能動的に取り組めるのでモチベーションが維持しやすく、多少の困難も解決して乗り越えようと意欲も湧いてきます。今の自分は目標に対してどこまで歩みを進めたのか、進んでいる方向性が間違っていないかを学年の終わりに振り返り、軌道修正することもできます。さらに、教員がアドバイスを書き込み、皆さんの目標達成を応援していきます。

本学オリジナルの活動にも対応チャレンジ全部を記録できる

課外活動や留学、Hulip（ヒューマンライフ支援センター）での活動など、学生生活の多岐に渡るチャレンジを記録することができます。これらが記録されていることで、就活や進路決定の際に行う「自己分析」をスムーズに進めることができます。自分が取り組んできたチャレンジやその結果が蓄積されていくと自信を持てますし、全体を見渡すことで次は何に挑戦しようか検討しやすくなります。

学修成果や取得資格の全てを一括保存できる

学修で活用したデータを保存しておくことができます。例えば、レポート作成のために収集した関連資料、実習日誌、授業で発表したプレゼンテーション資料などを保存しておけば、必要なときにいつでも参照することができます。また、学外で取得した資格等を記録することもできます。

活動を通して何を身につけたのか“成長の中身”を記録できる

取り組んだ活動を通して何を身につけることができたかを書き記し、どのような力を伸ばすことができたかを記録することができます。活動中にどんな工夫をしたか、苦境にどう立ち向かったかなどを思い起こすと、自分の強みや弱み、自分が大事にしている価値観などが見えてきます。また、活動中のエピソード等を記録しておけば、就活などの自己PRに具体性が増します。

教職員のK-PORT活用

学内の様々なデータを連携・統合し、学生に関する情報を共有・活用することで、細やかな学生支援体制を構築し、学修目標の実現をサポートします。

1.学修のPDCAサイクル

目標設定→学修→自己評価→教員よるコメント→次年度の目標設定という学修のPDCAサイクルを回していくことで、学生の自主的な活動と成長をサポートします。

2.学修成果の可視化

カリキュラムチェックリストと成績評価に基づき、DPに対する学生の学修成果を可視化します。このデータを元に、学科別・入学年度別・入試区分ごとに集計を行い、学科・科レベルでの学修成果の可視化が可能です。

3.教務システムと自動連携

学生の基本情報や履修科目、成績などの情報等は教務システムと連携し自動的にシステムに表示されます。K-PORTで一元的に学生に関連する情報を確認することができます。（情報は夜間に連携されます）

4.面談や進路相談のための学生理解

学修以外でその学生が取り組んできた課外活動や留学などの成果をK-PORTで確認でき、学生との面談やキャリア・進路の相談などの場面で、学生をより理解した上でアドバイスや応援ができます。

5.学生ニーズの発掘や分析

学生が入力する毎年の目標設定と振り返りは、学生が求めているニーズが発掘できるテキストデータとも言え、各学科・専攻・科でカリキュラムや授業内容の検討する際に分析データとして役立てることができます。

主なメニュー

- 目標設定と振り返り
- DP到達度（成績）
- DP到達度（自己評価）
- GPA
- Hulipでの活動
- GPS-Academic
- 活動記録
- 語学・留学関連
- 諸資格
- 面談カウンセリング記録
- 教職ポートフォリオ
- 履修カルテ
  （*子ども支援学科のみ）

画面イメージ

今後の予定

学修ポートフォリオに蓄積されたデータを活用し、学生が取得した学位・資格・能力・知識等の学修成果を対外的に可視化するための資料であるディプロマサプリメントの出力は、令和6年度からの利用開始を予定しています。

ログイン画面
https://k-port.tokyo-kasei.ac.jp

活動記録

学修・教育開発委員会※括弧内は主な検討事項

2022年4月13日
第1回委員会（メール回議）（令和4年度授業アンケートの実施等）
2022年5月11日
第2回委員会（メール回議）（令和4年度FD計画等）
2022年6月8日
第3回委員会（web会議）（GOOD授業賞の新設および実施等）
2022年7月13日
第4回委員会（メール回議）（SDに係る新規学外研修の実施等）
2022年9月14日
第5回委員会（メール回議）（学生調査の実施等）
2022年10月12日
第6回委員会（メール回議）（令和4年度「授業を通してみた学修達成度アンケート」等）
2022年11月9日
第7回委員会（web会議）（令和4年度リサーチウィークス等）
2022年12月7日
第8回委員会（メール回議）（令和4年度FDフォーラム等）
2023年1月11日
第9回委員会（メール回議）（令和4年度FDフォーラム等）
2023年2月8日
第10回委員会（メール回議）（令和4年度FDフォーラム等）
2023年3月8日
第11回委員会（メール回議）（令和4年度後期授業アンケート結果報告について）

学修・教育開発センター会議※括弧内は主な検討事項

2022年4月26日
第1回センター会議（web会議）（GOOD授業賞の新設および実施等）
2022年5月24日
第2回センター会議（web会議）（令和4年度教職員研究会等）
2022年6月21日
第3回センター会議（web会議）（Qlik Senseの利用等）
2022年7月12日
第4回センター会議（web会議）（令和4年度教職員研究会等）
2022年7月26日
第5回センター会議（web会議）（第二回ミニFD及び令和4年度教職員研究会等）
2022年8月26日
第6回センター会議（web会議）（令和4年度教職員研究会等）
2022年9月26日
第7回センター会議（web会議）（令和4年度教職員研究会等）
2022年10月25日
第8回センター会議（web会議）（アセスメントプラン等）
2022年11月29日
第9回センター会議（web会議）（リサーチウィークスオープニングレクチャー等）
2022年12月21日
第10回センター会議（web会議）（「GOOD授業賞」の内規改定等）
2023年1月25日
第14回センター会議（web会議）（FDについて）
2023年3月2日
第15回センター会議（web会議）（教職員研究会第二部＜職員の部＞アンケート結果について）
2023年3月未定
第16回センター会議

行事

22022年4月12日
スタートアップセミナー自主自律広報誌vol.17（発行）
2022年4月14・28日
新入生ウェルカムパーティー（学生CRED企画・運営）
2022年5月20日
CREDレター No.25（発行）
2022年5月24日
スタートアップセミナー自主自律広報誌vol.18（発行）
2022年5月26日
第一回ミニFD「『アセスメントプラン策定』と『教学マネジメント』の情報処理整理～現状の整理から今年度の目的・役割・推進方法を考える～」（企画・運営）
2022年6月7日
スタートアップセミナー自主自律広報誌vol.19（発行）
2022年7月12日
スタートアップセミナー自主自律広報誌vol.20（発行）
2022年7月21日
令和4年度教職員研究会　第一部　基調講演（企画・運営）※オンライン開催
2022年7月27日
GPS-Academic　教職員向け報告会（板橋キャンパス）
2022年7月28日・8月1日
GPS-Academic　教職員向け報告会（狭山キャンパス）
2022年7月28日
第二回ミニFD「効能や効果、改善のアクションを見据えたデータ分析の事例について～学科アセスメントプラン（案）に基づく可視化の方法や分析のヒントを知る～」（企画・運営）
2022年8月25日
スタートアップセミナー自主自律広報誌vol.21（発行）
2022年8月29日～10月28日
第1回教育改革推進(学長裁量)経費予算による研究・開発シリーズ「COVID-19パンデミックを契機とした実習教育改革 - OSCEを用いたProblem-based Learningによるリハビリテーション学習システムの確立 -」（オンデマンド）（企画・実施）
2022年9月9日
共催によるSDイベント「うつ病を知る」（共催）※9月16日(金)~10月10日 動画配信
2022年9月6日
令和4年度教職員研究会　第二部　理事の部　教員の部（企画・運営）
2022年9月20日
スタートアップセミナー自主自律広報誌vol.22（発行）
2022年9月22日
CRED通信No.16（発行）
2022年10月~11月
令和4年度教職員研究会　第二部　職員の部（企画・運営）
2022年10月22・23日
緑苑祭（学生CRED企画・運営）
2022年10月21日
GOOD授業賞表彰式（企画・運営）
2022年11月1日
学長と学生の意見交換会（企画・運営）
2022年11月7日~12月2日
第2回教育改革推進(学長裁量)経費予算による研究・開発シリーズ「施設実習におけるルーブリックの開発」（オンデマンド）（企画・実施）
2022年11月8日
スタートアップセミナー自主自律広報誌vol.23（発行）
2022年11月18日
CREDレター No.26（発行）
2022年12月1日
クリスマス交流会（学生CRED企画・運営）
2023年1月10日
第三回ミニFD「学科独自のアセスメントプラン活用に向けて～高等教育を取り巻く論点・他大学の課題意識から改善の見通しを持った可視化を学ぶ～」（企画・運営）

2023年1月27日~2月28日
第3回教育改革推進(学長裁量)経費予算による研究・開発シリーズ「自律的学習者を育てるプログラムの開発」(オンデマンド)(企画・運営)
2023年1月31日
教職員研究会　第二部　職員の部　理事会への報告(企画・運営)
2023年2月15日～2月28日
リサーチウィークス(実施)
2023年2月15日
リサーチウィークスオープニングレクチャー(企画・運営)
2023年2月17日
リサーチウィークスFDフォーラム(企画・運営)
2023年2月18日
共催によるSDイベント「不登校の現状と包括的支援」(共催)
2023年2月22～28日
教育改革推進(学長裁量)経費予算による研究・開発の報告(オンデマンド)(企画・運営)
2023年2月28日
自校教育科目「スタートアップセミナー 自主自律」研修(企画・運営)
2023年3月3日
「協同学習における評価とその実際」の研修(企画・運営)
2023年3月7日
自校教育科目「スタートアップセミナー 自主自律」研修(企画・運営)
2023年3月28日
自校教育科目「スタートアップセミナー 自主自律」研修(企画・運営)

出張歴・外部研修(オンライン参加含む)

2022年4月11日
アクティブラーニング教室見学@内田洋行ショールーム:安積和広
2022年5月13日
第13回 教育 総合展(EDIX)東京@東京ビックサイト:神保正典
2022年5月20日
大学行政管理学会第64回FM研究会@TOTOテクニカルセンター:神保正典
2022年6月30日
GPS-Academic　全国データ報告セミナー @オンライン:丸山毅、宮東城
2022年7月22日
第6回大学DX推進セミナー @オンライン:丸山毅、宮東城
2022年8月05日
大学行政管理学会第65回FM研究会@文教大学あだちキャンパス:神保正典
2022年9月29日
大学教育・経営への学生参画と今後の展開@メディア参加:矢野穂
2022年10月17日
QuonAcademy「大学職員のための大学設置基準入門Ⅰ」@オンライン:神保正典
2022年12月19日
QuonAcademy「大学職員のための大学設置基準入門Ⅱ」@オンライン:神保正典
2022年12月23日
筑波大学Rcus大学マネジメントセミナー(高等教育政策の最新動向)@オンライン:神保正典
2023年2月7日
女性学長サミット@オンライン:神保正典
2023年2月21日
Between大学経営シンポジウム@オンライン:丸山毅
2023年3月4日
大学行政管理学会「大学企画担当者勉強会　特別シンポジウム」@オンライン:神保正典
2023年3月7日
文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」説明会@オンライン:神保正典

学科・科主体のFD活動

2023年3月13日
看護学科研究支援プロジェクト教員向け講演会「教育実践を研究につなげ、研究成果を教育実践に還元する

新規&追加購入文献

- 「大学IR標準ガイドブック インスティテューショナル・リサーチのノウハウと実践大学改革」井芹俊太郎、近藤伸彦、松田岳士、塚本浩太、日本IR協会、株式会社インプレスR&D
- 「学習設計マニュアル「おとな」になるためのインストラクショナルデザイン」鈴木克明、美馬のゆり、北大路書房
- 「アサーション・トレーニング さわやかな〈自己表現〉のために」平木典子、金子書房
- 「シリーズ大学教育の質保証① カリキュラムの編成」中井俊樹、玉川大学出版部
- 「大学教育における高次の統合的な能力の評価 量的 vs. 質的、直接 vs. 間接の二項対立を超えて」斎藤有吾、東信堂
- 「社会はこうやって変える！ コミュニティ・オーガナイジング入門」マシュー・ボルトン、法律文化社
- 「大学教員のためのルーブリック評価入門」ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ、玉川大学出版部
- 「授業を活性化するLTD協同を理解 実践する紙上研究会」安永悟、医学書院
- 「研究開発入門 会社で「教える」、競争優位を「つくる」」中原淳、ダイヤモンド社
- 「研究開発入門「研修転移」の理論と実践」中原淳、島村公俊、鈴木英智佳、関根雅泰、ダイヤモンド社
- 「アイデア発想フレームワーク」堀公俊、日本経済新聞出版
- 「ビジュアル資料作成ハンドブック」清水久三子、日本経済新聞出版
- 「マンガでわかる統計学 素朴な疑問からゆる～く解説」大上丈彦、メダカカレッジ、サイエンス・アイ新書
- 「中学レベルからはじめる！ やさしくわかる統計学のための数学」ノマド・ワークス、ナツメ社
- 「大学広報を知りたくなったら読む本」谷ノ内識、大学教育出版
- 「Qlik Senseユーザーのためのデータ分析実践バイブル［Qlik Japan公認］」濱野正樹、鈴木由紀、中嶋翔、翔泳社

2022年度、CREDは以下のメンバーで活動しました

所長	兼古昭彦(造形表現学科)
副所長	佐藤隆弘(児童学科)
参事	大西淳之(栄養学科)
	小林理恵(栄養学科)
	濱田仁美(服飾美術学科)
	宮本康司(環境教育学科)
	田中恵美子(教育福祉学科)
	保坂遊(子ども支援学科)
センター専任職員	丸山毅／宮東城／神保正典／安積和広(兼務)／和田裕二／川島直子／矢野穂／
センター嘱託職員	間野莉加／公木杏子
センター業務補助員	佐藤初心／大西遥

2022.04–2023.03

IR報告

本学の数理・コンピュータに関わる能力の教育成果を追って

大学等における数理・データサイエンス・AI教育の取組を奨励するため、令和3年度より「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（リテラシーレベル）」が文部科学省主導のもと始まった。

当制度の目的や内容は文部科学省のサイト(*1)に記載がある通りだが、これを受けて本学においても2022年度より「東京家政大学「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」」を開設し、データサイエンスの視点を活用して”答えのない課題”に対して適切な解につなげられる思考力や解決力を養うことを推進している（*2）。ここで当制度と関連のある数理やICTに関する教育の成果について、これまでに本学で実施している学生調査（*3）をもとに報告する。

学生調査にある設問「入学した時と比べて、あなたの能力や知識はどのように変化しましたか」の「数理的な能力」と「コンピュータの操作能力」の結果について、図1・3に、それぞれ2014年度と2019年度、2020年度入学生の1年次と3年次の経年比較をグラフで表した。

数理能力について、2014年度から2020年度入学生にかけて、否定的回答（減った/大きく減った）の割合が2014年度35.6％から2019年度27.6％、2020年度15.6％と顕著に低下するとともに、肯定的回答（増えた/大きく増えた）の割合は2014年度10.6％から2019年度13.0％、2020年度17.0％と増加傾向が見て取れる。

2016年から2022年の3年生の比較でも、否定的回答は37.2％から17.0％と約20％減少していることが分かる。また3年生の平均点は2017年度以降上昇し続けている（図2）。これは、入学後に学生が受ける教育において、数理能力の維持につながる取り組みがなされていることが推察される。

コンピュータを操作する能力について、2014年度から2020年度入学生にかけて、否定的回答（減った/大きく減った）の割合が2014年度1.4％から2019年度2.1％、2020年度0.6％と2019年から2020年にかけて減少しているほか、肯定的回答（増えた/大きく増えた）の割合は2014年度74.7％から2019年度76.1％、2020年度91.0％とやはり2019年度から2020年度にかけて大幅に増加変動している。

これらはやはり2020年度以降のコロナ禍におけるメディア授業実施に伴う経験が大きく影響しているほか、それ以前の2017年度からの平均点の上昇傾向（図4）があることから、近年の入学後のコンピュータに関わる教育の成果が、操作能力向上の形で表れているとも推測される。

本学の、数理能力やコンピュータに関わる教育が近年向上している傾向があるなか、今後「東京家政大学「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」」を中心とした理数データ系の取り組みが、更なる教育成果につながることを期待したい。

*1：https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/suuri_datascience_ai/00002.htm
*2：https://www.tokyo-kasei.ac.jp/academics/educational_info/data_science.html
*3：大学IRコンソーシアム主催の共通調査。例年11月ごろ、1,3年生を対象に実施。回答者数は2014年1年1,446名、2016年3年1,323名、2019年1年1,404名、2021年3年1,009名、2020年1年1,427名、2022年3年581名

Writer
神保 正典
Masanori Jimbo
学修・教育開発センター

図1 数理的な能力の変化

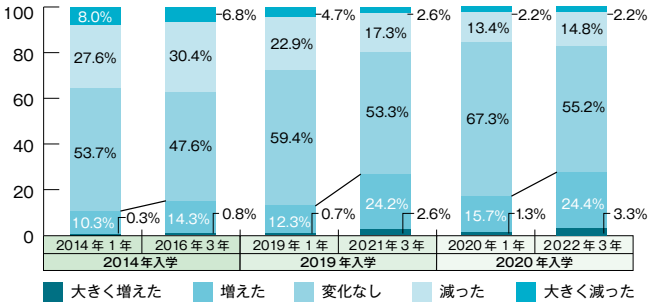


図2（数理的な能力）3年生 5点法平均点の推移

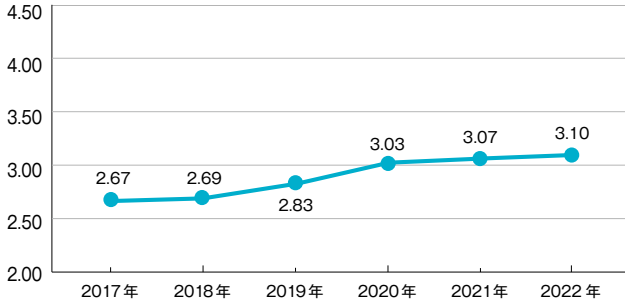


図3 コンピュータの操作能力の変化

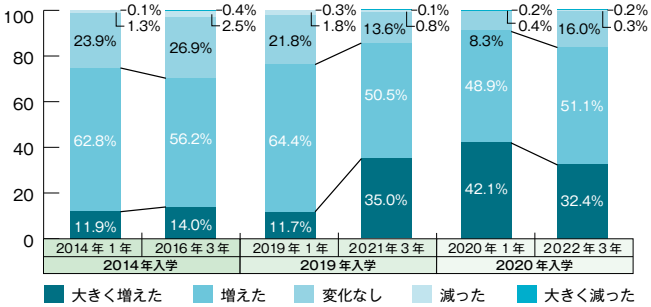
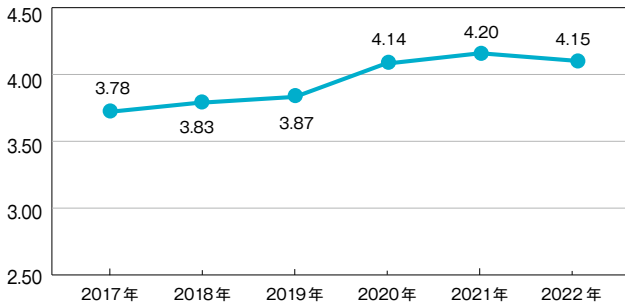


図4（コンピュータの操作能力）3年生 5点法平均点の推移



2023年3月発行　編集 / 発行：東京家政大学 東京家政大学短期大学部　学修・教育開発センター
〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1　TEL：03-3961-0284　E-mail：cred@tokyo-kasei.ac.jp